

仏教由来漢語「執着」についての考察

胡 新 祥

1. はじめに

現代中国語においても現代日本語においても「執着」という漢語は何れも「ある物事に強く心が引かれる、思い切れないこと。」の意味を表わす。簡単に中日同形同義語の部類に分類されがちであるが、現代中日両国語における「執着」の感情色彩は全く違うものである。現代中国語では「執着」は「對於人生的熱愛，對崇高理想的執着，這也是對的。」⁽¹⁾（人生に対する熱烈な愛情、崇高な理想に対する執着、これらは何れも正しいものだ。）のように、一般的に「粘り強く努力する」というふうにポジティブに解釈される。一方、現代日本語では「執着」の対象は大抵権力、名声、お金などとなり、つまり「執着」は「執念」の同義語として使われることが多い。

なお、中国の『漢語大詞典』（一九八六）を引いても、或いは日本の『日本国語大辞典』（二〇〇二）を引いても、「執着」以外に「執著」の表記も同時に書いてある。しかも、両辞書とも「執着/著」が本来仏教用語であると明記している。仏教用語から日常用語へ、「執着」と「執著」の表記問題、そして現代中日両国語における「執着」の感情色彩の差異など、「執着」にまつわる問題が複雑な様相を呈している。

よって、本論文は中日両国の豊富な言語資料を利用して、中日語彙交流の立場から「執着」を歴史的に考察しようとするものである。また、対照言語学の視点で中日両国語における「執着」の意味変遷を考察し、その背後に潜んでいる社会的な要因をも明らかにしたいと思う。

2. 現代中国語における「執着」と「執著」の棲み分け

現代日本語では「執着」という表記に統一されているが、現代中国語では「執着」のほうが一般的であるが、「執著」の表記も散見される。現代中国語における「執着」と「執著」の棲み分けに関して、使用する言語資料によって調査結果に若干の差異が生じるが、「執着」のほうが一般的であることが確実である。例えば、「語料庫在線」の「現代漢語語料庫」で調べてみると、「執着」は四十三件あるのに対して、「執著」は僅か十一件に過ぎない。なお、言語使用の規範性が高い『人民日報』を調べてみると、やはり同じ傾向⁽²⁾が見られる。

表1 現代中国語における「執着」と「執著」の使用状況

データベース	執着	執著
語料庫在線の現代漢語語料庫	43	11
人民日報図文データベース（1946～2020）	356	31

数こそ少ないが、下記のように「執著」が依然として健在している。

(1) 帶領鄉親承包植樹一三點六萬畝，用數十年如一日的執著和汗水，綠化荒山，

守護山林。 (我的祖国我的家 人民日報 2019 年 10 月 8 日第 20 版)

(2) 田漢作為一個從救亡図存の歴史烽火中走来的文芸家，身上所体现的戰士的情懷、芸術家の理想、真理追求者の執著。

(筆端深情写田漢 人民日報 2019 年 11 月 29 日第 20 版)

そして、注意すべきところは「執着」が「粘り強く努力する」の意味を表すとともに、下記用例 (3) (4) のように、「…を手にする (執る)」という意味をも表していることである。つまり、「執著」より「執着」の方が意味範囲が広いわけである。

表 2 現代中国語における「執着」と「執著」の意味合い

	①粘り強く努力する	②…を手にする (執る)
<u>執着</u>	○	○
<u>執著</u>	○	×

(3) 我執着一支金色的麦笛，一支剛剛告别泥土和麦穗，還散發出淡淡芳香的麦笛。

(金色的麦笛 人民日報 1993 年 12 月 27 日第 8 版)

(4) 他說，除了雨雪天氣，他差不多每天都要来広場放一兩個小時風箏。他手中執着線車，緩急有度地牽引糸線。

(長春節後正風寒⁽³⁾ 人民日報 1996 年 1 月 19 日第 4 版)

3. 「執著」は仏教由来漢語

現代中国語において「執着」のほうが圧倒的に多いが、本来は「執著」という表記だったという先行研究が、中国語言語学の分野では多くの研究者によって発表されている。⁽⁴⁾ 例えば、晁繼周 (二〇一三) によると、「執著」の最も早かった用例は一五〇〇年前の『百喻經』にさかのぼる。「執着」という表記が後に誕生したものである。明の時代に成立された『水滸伝』第二十二回に出ていた用例が一番早かったという。

“執著” 最早的出所，可以追溯到 1500 年前的《百喻經》。

“執着” 這個詞形出現得更晚一些，在成書於明代的《水滸伝》第二十二回中可以見到“執着” 的最早書証。⁽⁵⁾ (晁繼周 二〇一三)

なお、本家の「執著」は元々仏教用語である。この点に関して、『漢語大詞典』(一九八六)、『日本国語大辞典』(二〇〇二)、そして中国佛教文化研究所が編集した『俗語佛源』(二〇〇八) の記述を下記の通りに抜粋する。

執着 原為佛教語。指对某一事物堅持不放，不能超脱。

《比喩經・梵天弟子造物因喩》：諸外道見是断常事已，便生執着，欺誑世間作法形象，所說實是非法。唐・白居易《伝法堂碑》：凡不無明，二乘執着。⁽⁶⁾

『漢語大詞典』(一九八六)

【執着・執著】 ある物事に深く思いをかけてとらわれること。執心して思いきれないこと。しゅじやく。

*雲笈七籤「太上道君、告普光真人曰、衆生執著、是故無明悟」

*大般若經 - 七一「彼如実知一切法相能不執著故復名摩訶薩」⁽⁷⁾

『日本国語大辞典』(二〇〇二)

【執著】 指片面而孤立地理解併固執事物的妄情和妄想。如《大般若經》卷七一：能如実知一切法相而不執著故，復名摩訶薩。又如《菩提心論》：凡夫執著名聞利養資生之具，務以安身。衆生虚妄的“執著”是很多的，主要是“我執”和“法執”。

⁽⁸⁾

『俗語佛源』(二〇〇八)

なお、仏教用語である「執著」の造語原理に関して、梁曉虹(一九九四)⁽⁹⁾によると「同義連合」となり、つまり同義字の「執」と「著」による並列関係である。さらに金文明(一九九五)、晁繼周(二〇〇三)にも同様の指摘がある。

執、著二字義近而並列，都是固定、固著的意思。⁽¹⁰⁾ 金文明(一九九五)

“執著”屬於並列結構，“執”義為堅持，“著”義為附着。⁽¹¹⁾ 晁繼周(二〇一三)

「執」は日本語のなかの「固執」「執念」「妄執」「執心」のように、「意地をはる。しつこく取りつく。」という意味を表すことができる。一方、「著」は古代中国語では多音多義字で、非常に難しい様相を呈している。なお、「著」の音義に関して、資料によって若干の差異がある。ここでは『漢語大詞典』(一九八六)⁽¹²⁾の記述に基づき、下記の通りに整理しておく。

表3 古代中国語における「著」の音義表

中国語の音	義	日本語の音	日本語の語例
zhù	著しい、著すなど	ちよ	著名、著作
zhuó	取りつく	ぢやく(呉音)	執著(執着)、愛著(愛着)
zhe	助詞	×	×

4. 「執著」から「執着」への移行

「著」と「着」の関係に関して、『漢字源流字典』(二〇〇八)、『常用漢字源流字典』(二〇一〇)などによると、「著」が本字、「着」が俗字であることがわかる。

宋代又由“著”的草体楷化，分化出“着”字。⁽¹³⁾（『漢字源流字典』 二〇〇八）
 着 由“著”分化演變而成，本義讀 zhuó，接觸或附着。

【辨析】①着/著 “着”由“著”分化而來，這兩個字是同源字。⁽¹⁴⁾
 （『常用漢字源流字典』 二〇一〇）

月日が流れ、「著」の「意地をはる。しつこく取りつく。」の意味が俗字の「着」に移行してしまったため、「執著」の字形も「執着」に変わってしまったのである。しかし、「執着」の表記がいつから使われるようになったか、また仏教經典、古代漢語の資料において両者の棲み分けに関しても議論が残るところである。

4.1 仏教經典における「執著」と「執着」

仏教用語である「執著」の最も早かった用例を特定するのはなかなか難しいが、鳩摩羅什（三四四～四一三）による『集一切福德三昧經』に既に「菩薩應當無所執著」「亦不執著如是住處」があり、その歴史がかなり古い。一方、「執着」の初出に関して、筆者の調査によると、玄奘（六〇二～六六四）の『大般若波羅蜜多經卷』が一番早かった。

(5) 是行般若波羅蜜多亦不執着此諸法相。（玄奘『大般若波羅蜜多經卷』 唐）

唐の時代から「執着」が出始めたが、仏教經典における「執著」の使用頻度とは比べものにならない。SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース（以下は SAT と略する）を調査したところ、「執著」は四八六七件あるのに対して、「執着」は僅か十一件しかない。さらに言うと、玄奘（六〇二～六六四）の漢訳仏教經典に「執著」は二〇四〇件もあるのに対して、「執着」は僅か一件しかない。そうすると、玄奘の『大般若波羅蜜多經卷』における「執着」は単なる書き間違いではないかと思われる。

表4 「SAT」における「執著」と「執着」の使用頻度

	執著	執着
SAT	4 8 6 7	1 1
玄奘	2 0 4 0	1

4.2 仏教用語から日常用語への変貌

「世界」「我慢」「平等」などのように、現代中国語と日本語において元々仏教由来の言葉がたくさん存在している。ここでは仏教用語の「執著」を例に、その日常用語への変貌プロセスを追ってみる。

(6) 若還缺一不芳菲，執著波查忘失路。（呂岩『敲爻歌』 唐）

(7) 執著貪緣，非其旨也。必乞陛下力求民瘼，虔奉宗祧。
 （劉昫『旧唐書』 九四五）

(8) 読書若有所見，未必便是，不可便執著。 (黎靖徳『朱子語類』 一二七〇)

用例(6)は呂岩(唐)による『敲爻歌』の一部である。この『敲爻歌』は道教の教えを説くものであり、なかの「執著」は仏教から借用してきた言葉である。筆者は以前呂岩の『谷神歌』『水龍吟』を調べたことがあり、なかには「結果」「彼岸」「輪廻」「三途」といった仏教用語がたくさん見られた。用例(7)は劉昫(八八七～九四六)による歴史書『旧唐書』の一部であり、仏教用語の「執著貪縁」を引用して皇帝に善政を行うことを諫める。

用例(6)(7)は仏教用語の引用で仏教色が濃厚であるが、用例(8)の『朱子語類』(一二七〇)に至っては仏教の色彩が一切含まれず、「読書に当たって己の見解に執著すべきではない」と教え諭すものである。つまり、仏教用語→仏教用語の引用→日常用語というプロセスが推測できる。

4.3 古代中国語における「執著」と「執着」

なお、古代中国語において日常用語となった「執著」と「執着」の使用頻度に関して、仏教経典と同様の傾向が見られる。例えば、「語料庫在線」の「古代漢語語料庫」を調べてみたところ、「執著」は十八件あるのに対して、「執着」は僅か二件しかない。

(9) 我只怕雷横執着，不会周全人，倘或見了兄長，没個做円活処。
(施耐庵『水滸伝』 明)

(10) 你今果肯痛恨前非，我也何必執着你已往所為。
(馮夢竜『醒名花』 明)

上記のように、漢訳仏教経典にせよ古代中国語にせよ、俗字表記の「執着」があったものの、主流となったのは依然として本来の「執著」である。その理由に関して、古代中国語において文言文(文語)が文章のスタンダードであり、俗字表記の「執着」はいわゆる庶民が使用する野暮なものであると考えられる。一方、古典日本語における「執着」と「執著」の使用頻度は古代中国語と全く逆のものである。この点に関しては後ほど詳述する。

5. 新文化運動による「執着」の大転換

それなら、いつから「執着」の使用頻度が「執著」を上回ってしまうのか。筆者は「晚清期刊、民国時期期刊全文数据库」(一八三三年～一九四九年)と「申報数据库」(一八七二年～一九四九年)を調査した。調査結果を言うと、一九二〇年代以前「意地をはる。しつこく取りつく。」という意味を表す「執著」と「執着」がいずれも皆無であり、あるのは「…を手にする(執る)」という意味を表すものばかりであった。

一九二〇年代以降、「執著」と「執着」が比較的に多く見え始め、その時点から既に「執着」のほうが圧倒的に多かったのである。このように「執着」のほうが優位に立てたのは「新文化運動」によるものと考えられる。新文化運動の一環として古来の文語文を捨てて、群衆の間に生きる口語による文学を創造する白話運動が起こったが、

これは日本語の言文一致運動に当たるものである。例えば、新文化運動の旗手とされる胡適（一八九一～一九六二）は一九一七年一月に有名な『文学改良芻議』を発表して、形骸化した文語文に代わって俗語・俗字を使用しようと呼びかけた。

八曰不避俗字俗語 然以今世歴史進化的眼光觀之，則白話文学之為中国文学之正宗，又為将来文学必用之利器，可断言也。以此之故，吾主張今日作文作詩，宜采用俗語俗字。与其用三千年前之死字，不如用二十世紀之活字。与其作不能行遠不能普及之秦漢六朝文字，不如作家喻戶曉之《水滸》、《西遊》文字也。

（『文学改良芻議』 一九一七）

八曰く俗字俗語を避けないこと。今日、文章を書くなり詩を書くなり、俗語俗字を使うべし。三千年前の死んだ字を使うより、二十世紀に生きている字を使ったほうがよい。秦、漢、六朝の文字を使って広く読まれない文章を書くより、一般的によく知られている『水滸伝』、『西遊記』のなかの字を使ったほうがよい。⁽¹⁵⁾

新文化運動の影響を受けて、俗字表記の「執着」が一躍にして主流となった。しかし、新文化運動の影響は単なる表記の面に留まらず、「執着」の意味変遷にも大きな影響を与えたのである。仏教用語の「執著」は本来「物事に拘泥する心、執念」という意味を表す。「執著」には仏の教えに拘泥する「法執」と個体的な自我を实体視して拘泥する「我執」があり、何れも悟りの妨げとなる。そのため、「執著」の観念を取り除き、ようやく悟りの境地に至るのである。よって、古代中国語において日常用語へと変化した「執著」は下記用例（11）（12）のように、なお仏教におけるマイナスなイメージを持つ。

- (11) 学者觀書，病在只要向前，不肯退步看。愈向前，愈看得不分曉。不若退步，却看得審。大概病在執著，不肯放下。

（黎靖徳『朱子語類』 一二七〇）

- (12) 先生曰：固是事事要如此，須是識得個頭腦乃可。義即是良知，曉得良知是個頭腦，方無執著。
（徐愛ら『伝習録』 一五一八）

しかし、大変興味深いことに近代中国語における「執着/著」は大抵、反仏教の立場を取り、仏教の唱える「執著」の観念を取り除き、悟りの境界に至るのを虚無主義として批判し、「執著」を「粘り強く努力する」とポジティブに解釈し始めた。

- (13) 宇宙は大執着的表現，山河大地，日星煙雲，一切的現象全都由執着而起，而存在。…中略…，人生也是一種執着，佛氏否定人生，主張打破「我執」「法執」。…中略…天才是執着的觀念之無窮力量。具有偉大天才的人是根本上大執着的人。
（今吾『大執着的人生態度』 一九二四）

- (14) 我在『讀書生活』上写過一篇批評『給青年的十二封信』的文章，裏面有這

様一句话：『我們青年不是天上的神而是地上的人，我們不能不執着於世間的一切。』所謂『執着』就是指一種不放鬆的態度。…中略…，有位誦過幾本佛經的朋友頗不以我所說的為然。他以為宇宙的本質原是虛空，執着於世間的一切，正若要弩住水底的月亮，只是引起無端的煩惱罷了。…中略…，因此我們不能不要求堅決的執着態度了。（胡繩『談『執着』』一九三六）

用例(13)では、「佛氏否定人生，主張打破「我執」「法執」（仏教は人生を否定し、「我執」と「法執」を取り除くことを唱える）とまず仏教における「執著」を提起する。その一方、「具有偉大天才的人是根本上大執着的人。」（偉大な天才は物事に徹底的に執着する性根を持つ）と、「執著」を「粘り強く努力する」と新しく解釈した。

用例(14)は中国著名な哲学者である胡繩（一九一八～二〇〇〇）が一九三六年に書いた文章である。胡繩氏は「『我們青年不是天上的神而是地上的人，我們不能不執着於世間的一切。』所謂『執着』就是指一種不放鬆的態度。」（我々青年は地上に生きる人間であるため、世間の物事に執着すべし、ここの「執着」とは弛まず努力する態度を指す。）と主張する。胡繩氏の主張に対して、ある仏教に詳しい友達は「執着於世間的一切，正若要弩住水底的月亮，只是引起無端的煩惱罷了」（世間の物事に執着することはあたかも水に映る月を掴むようなもので、くだらない煩惱を増やすしかない）と悲観した。その悲観論に対して、胡繩氏はさらにいろいろと論じ、最後の「因此我們不能不要求堅決的執着態度了。」（故に我々は物事に執着する態度を絶対必要とする）と強く呼びかけた。

近代中国語における「執著」の感情色彩に関して、筆者は「晚清期刊、民国時期期刊全文数据库」（一八三三年～一九四九年）を調べた結果、「執著&執着」の使用例は全部で十四件あり、そのうち「粘り強く努力する」と解釈すべき用例は十一件あった。ほかには「申報数据库」（一八七二年～一九四九年）も調査したが、やはり同様の傾向が見られる。

なぜこの時期に「執着/著」の感情色彩が大きく変わったか、これも上述の新文化運動と関係があると考えられる。新文化運動は科学と民主主義を旗印として、中国の革命を妨げる儒教的・封建的な文化・制度を批判するものである。こういう状況下、知識人が仏教の唱える「執著」の観念を取り除き、ようやく悟りの境地に至るのを虚無主義として批判し、「執着」を「粘り強く努力する」と解釈するのも無理はないだろう。

この時期に確立された「執着イコール粘り強く努力する」という新解釈は現代中国語にも脈々とつながっている。筆者が「人民日報図文数据库」（一九四六～二〇一九）を調査した結果、ごくわずかな用例を除き、『人民日報』における「執着/著」は全部「粘り強く努力する」というポジティブな意味合いであった。

6. 小まとめ

「執著」という言葉は元々仏教用語であり、「意地をはる。しつこく取りつく。」という意味を表す。仏教の世界において「執著」が悟りの妨げとなり、取り除くべきものであった。時代が下がり、仏教用語の「執著」が古代中国語に吸収され、そして俗

字表現の「執着」も誕生した。しかし、日常用語となった「執著」あるいは「執着」は依然として「意地をはる。しつこく取りつく。」のマイナスな意味合いを持っていた。

二〇世紀初頭に中国で起きた新文化運動は科学と民主主義を標榜し、文学の面では文語文学を捨て、白話文学を提唱した。時代の流れに伴って一九二〇年代以降、俗字表現の「執着」が本来の「執著」に逆転し、多用されるようになった。また、仏教が唱える「執著」の観念を取り除き、悟りの境地に至るという教えが虚無主義として批判され、「執着」が「粘り強く努力する」とポジティブに解釈され始めた。その影響が現代中国語にも繋がっている。

7. 日本語における「執着」の誕生

日本語における「執著」は無論、仏教經典と共に中国から輸入されたものである。例えば、『日本国語大辞典』（二〇〇二）も『大般若經』から「彼如実知一切法相能不執著故復名摩訶薩」の文を引用している。興味深いことに中国語のほうでは新文化運動の影響を受けて一九二〇年代以降「執着」がようやく「執著」に逆転できたが、日本語の方では「執着」の定着が随分早かったように思われる。

- *今昔物語集〔一一二〇頃か〕二・三七「我、昔人と生れて沙門と成れりと云へども、房舎を執着して慳貪（けんどん）を不捨りき」
- *色葉字類抄〔一一七七～八一〕「執着 シウヂャク」
- *寛永版曾我物語〔南北朝頃〕四・大磯の虎思ひ初むる事「然ればしふぢやく身を離れず、おんせい尽きずして」
- *文明本節用集〔室町中〕「執着 シウヂャク」
- *日葡辞書〔一六〇三～〇四〕「モノニ xugiacu (シュウヂャク) スル」
- *浮世草子・好色一代男〔一六八二〕六・三「是程まではおほくの女に思ひをさせ、執着 (シウヂャク) 御のがれあるまじと」
- *十善法語〔一七七五〕一「一切の執着ここに解脱す」
- *雲笈七籤「太上道君、告普光真人曰、衆生執著、是故無明悟」
- *大般若經 - 七一「彼如実知一切法相能不執著故復名摩訶薩」
(『日本国語大辞典』 二〇〇二)

『日本国語大辞典』（二〇〇二）によると、早くも『今昔物語集』（一一二〇年頃か）に既に「執着」が登場し、さらに『色葉字類抄』（一一七七～一一八一）にも「執着」が堂々と収録された。筆者は『新編 日本古典文学全集』と東京大学史料編纂所の古文書データベースを調べて、全体的に「執着」が優位に立ったことが分かった。例えば、無住（一二二六～一三一二）の仏教説話集『沙石集』（一二八三年）に、「磯に執着して苦患を受け」と「我相の執著を堅くし」があるように、「執着」と「執著」が同時に使われていた。しかし、『沙石集』（一二八三年）では、俗語表記の「執着」が十二件あるのに対して、本来の「執著」が僅か五件に過ぎない。

さて、日本語のなかの「執着」は中国語の影響を受けたものなのか、それとも日本語独自の発展と見るべきなのか。前述のように、仏教經典において「執著」が四八六

七件もあるのに対して、「執着」は僅か十一件に過ぎない。なお、古代中国語における「執着」の初出は現時点で『水滸伝』(明)が一番早かったが、日本の『今昔物語集』(一一二〇年頃)よりは遅かった。

そして、仏教経典における十一件の「執着」を精査したところ、とても興味深いことが分かった。最初に「執着」を使い出したのは中国人の玄奘(六〇二～六六四)ではあるが、玄奘による「執着」は一回のみ、一方玄奘による「執著」は二〇四件もある。よって、玄奘の「執着」は単なる書き間違いと理解してよかろう。それ以外の十件のうち、一件は選者不明、一件は新羅の元暁(六一七～六八六)、残りの八件は何れも安澄(七六三～八一四)、空海(七七四～八三五)、真興(九三五～一〇〇四)、光宗(一二七六～一三五〇)、宥快(一三四五～一四一六)、頼宝(一二七九～一三三〇)など日本人の僧によるものである。

安澄、空海らの「執着」は玄奘から受けたものとは到底考えにくい。「執着」は日本人の漢字知識による意図的な改正であろう。その理由に関して、「着」は「著」の俗字であるため、意味が通じるし、日本漢字音では両者が「ちゃく」で共通している。なお、当時の中国語では既に「着」が「付着する」という意味で広く使われていたため、「著しい、著す」の「著」と使い分けるために、意図的に「執着」を使い出したと思われる。実は「執着」以外に、古代中国語にある「膠著」「付著」「著落」「沈著」が日本語では何れも「着」の漢字を使っている⁽¹⁶⁾。

8. 日本語における「執着」の感情色彩変化

8.1 古典日本語における「執着」の感情色彩

古典日本語において「執着」が早くも日常用語となってしまった。とても面白いことに古典日本語では古代中国語と同じように、「執着」は大抵「執念」と解釈され、つまりマイナスな感情色彩で使われていた。例えば、『新編 日本古典文学全集』では下記の用例が見られる。

(15) 三国異なりといへども、真実学道の者、未だ、かくの如きの事あらず。ただ、心を世事に執着する事なかれ。(懐奘『正法眼蔵随聞記』 一二八三)

(16) その靈魂亡霊ども、なほもこの地に止まつて夫婦執着の妄念を遺しけるにや。

(小島法師『太平記』 一三七一か)

(17) 我こそ上の醍醐あたりに、身をころもになし、後の世を大事とおこなひすましてあるを、二たび髪をのばさせ、ほどなく迷わし給ふ事、執着そこをさらせじ。(井原西鶴『好色一代男』 一六八二)

(18) この男を見捨て給はば、みづからが執着とても、脇へはゆかじ。

(井原西鶴『好色五人女』 一六八六)

(19) 国師重ねてのたまふは、これはそれに引きかへて、恋慕の恨み執着の一念、かくては後生も浮かみがたし。

(近松門左衛門『用明天王職人鑑』 一七〇五)

(20) 執着のなみだの雨に濡れじとやかさをめしたるくはんをんの像。

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』 一八〇二～一八一四)

8.2 現代日本語における「執着」

現代中国語において「執着」はもっぱら「粘り強く努力する」というポジティブな意味合いで使われ、完全に脱仏教した使い方である。その理由は二〇世紀初期に起きた新文化運動に求められる。一方、現代日本語において「執着」はどのような感情色彩で使われているか、筆者が「朝日新聞記事データベース」から最新の一〇〇例を抽出して分析したところ、マイナスなイメージの用例は六十二件で大半を占めており、ポジティブな意味合いの用例は二十五件、どちらとも言えない用例は十三件あった。

(21) その疑問は、文明の崩壊や名声への執着、拳銃規制の必要性、権力の定義、型にはまらない思考などについて向けられているの。

(朝日新聞 2019年11月29日)

(22) 思うに、この世とあの世の間には、執着や嫉妬などのカルマから解放されて赦せるようになる、まだ名前のついていない、何ともいえない場所があるんじゃないだろうか。

(朝日新聞 2019年12月21日)

(23) 船山さんは旧民主党勢力には自民のような権力への執着と、地元根付く泥臭さが足りないと反省を込めて指摘する。(朝日新聞 2019年12月24日)

(24) 本作は幾度となく身の危険にさらされても、他の生き方を選ばず戦争報道に執着した彼女の人生を辿る。(朝日新聞 2019年09月13日)

(25) 僕らが卒業論文や修士論文を書いた頃はまだワープロはなく、気合を入れて文章を書く時の筆記具の代表は、やはり万年筆でした。小学校卒業の記念に、恩師からペリカンの万年筆を贈られ、「大人の気分」が味わえるので大事に使っていました。いつの間にかなくしてしまい、以来、執着するようになりました。(朝日新聞 2019年10月12日)

上記の用例(21)(22)(23)は「名声への執着」「執着や嫉妬」「権力への執着」があるように、「執念」という意味を表す。一方、用例(24)(25)のように「…にこだわり、徹底的に追求する」というポジティブな意味合いもないわけではない。いずれにせよ、全体的に見ると現代日本語において「執着」はマイナスな意味合いで多用されると言える。

8.3 スポーツ界に重宝される「執着心」

現代日本語において「執着」以外に「執着心」という言葉が熟語としてよく使われ

ている。「執着心」も本来仏教用語であり、例えば『日本国語大辞典』（二〇〇二）における初出用例は「執着心に依て九海雑類の身なむど感じたるもの、此業力所感の故に、業の尽不尽に依て改生」（『覚海法橋法語』 十二C終～十三C前）であり、仏教の世界では当然取り除くべきものである。

しかし、面白いことに現代日本語における「執着心」は主にスポーツの世界に特化していて、「徹底的に努力する」というポジティブな意味合いで使われている。筆者が「朝日新聞記事データベース」から最新の一〇〇例を抽出して分析したところ、ポジティブな意味合いの用例は七十五件、マイナスな意味合いの用例は二十件、どちらとも言えない用例は五件であった。

- (26) 五輪金への執着心は強かった。3年前のリオ五輪の表彰台では隣の金メダルを食い入るように見つめた。 (朝日新聞 2019年12月22日)
- (27) J1の強豪鹿島アントラーズで培ってきた「勝利への執着心」をチームに落とし込んでいくつもりだ。 (朝日新聞 2019年12月31日)

用例(26)(27)は何れもスポーツの世界に特化したポジティブな使い方である。現代日本語における「執着」の使用様相との齟齬に関して、やはりスポーツの世界では世間一般の過不足というより、徹底的に努力するという根性論が美德とされていることによるものであろう。このことを裏付ける例をあげると、つい先日、野球の名投手であるダルビッシュ有が『REAL SPORTS』の独占インタビューに応じて、日本野球界の根性論を批判した。ここからも日本のスポーツ界では根性論が根付いていることが分かる。

アメリカには根性論のような考え方がないのに、なぜそんなに優秀な人材が生まれるのか。…中略…、だから、根性論については一度考え直さないと。もちろん、それしかやってきていないから、根性論を否定することによって自分の人生を否定することになってしまう人が多いとも思います。

(『REAL SPORTS』 二〇二〇年一月十二日)

8.4 明治期における「執着」の感情色彩

- (28) 人恒ニ執著を病む。然レドモ亦槩論スベカラズ。良ニ学ハ好ムヲ以テ成ルニ因ル。之ヲ好ムノ極ヲ着ト名ク。羿ハ射ニ着シ。遼ハ丸ニ着シ。連ハ琴ニ着シ。 (株宏『竹窓随筆和解』 一八八四)
- (29) 執着心とは執念深きと云ふ事にして普通悪き意味に用いらるゝは誤れりと云ふべし、忍耐は実に執念の深きことを云ふものなり。コロムバスは新大陸の発見に執念深かりき、サイラス、ダブリュー、フヒールドは大西洋海底電線の敷設に執念深ありき。 (綾部竹之助『立身談片』 一

八九八)

- (30) 総ての点について、人類は執着に生活す。嗚に人類のみならず、有ゆるもの亦た執着に生活せるを見るなり。花に恋する胡蝶、これ美に対するの執着を語るにあらずや。葉末にすだく虫吟、これ露に対するの執着を語るにあらずや。
(池元半之助『側面観』 一八九九)

八九九)

用例 (28) は「人恒ニ執著を病む」と前置きしつつ、それを一概に論じるべきではないと話を替え、中国の古典にある「後羿射日」「宜遼弄丸」「琴家成連」の典故を持ち出し、物事に徹底的に追及する精神を称え、仏教用語の「執著」をポジティブに解釈してしまう。用例 (29) は「執着心とは執念深きと云ふ事にして普通悪き意味に用いらるゝは誤れりと云ふべし」と問題提起して、欧米人の成功談を数々引き出しにして、「執着イコール忍耐強い」という図式を成立させようとした。用例 (30) は人類、ないしありとあらゆるものの「執着」を謳歌する文言である。

このように、明治期に「執着」をポジティブに解釈する用例はほかにもたくさんある。これは現代日本語における「執着」のポジティブな使い方と繋がっていると考えられる。

そして、時代こそ四十年ほどのずれがあるが、以上の用例はあたかも中国の新文化運動による「執着」の感情色彩変化を彷彿させ、いわば「異路同帰」である。その背後に共通しているのは国家の近代化による旧価値観の打破と考えられる。

9. 「執着」の漢字音

本来、中国語における「著」は多音多義字であり、「付着、取りつく」の意味を表わす場合は「zhuo」と読み、これは日本語の漢字音で言うと呉音の「ぢやく」に当たる。当然、仏教用語の「執著」は「しゅうぢやく」と読まれるはずである。四つ仮名の関係で仮名の表記が「しゅうじゃく」になってしまうことも多いが、なぜ最終的に「しゅうぢやく」に辿り着いたか、これは「着」の漢字音と関係していると思われる。字音語素の「着」を後部含む「到着」「粘着」「付着」「膠着」など何れも「ぢやく」と読まれ、つまり「ぢやく」という漢字音に引きずられて、「しゅうじゃく」から「しゅうぢやく」に変化したのであろう。なお、「執著」と全く同様の現象が仏教用語の「愛著」にも見られ、『日本国語大辞典』(二〇〇二)における「愛著」の記述を下記の通りに抜粋する。「愛著」と「執著」もいわば「異路同帰」という感覚である。

元来は仏道の障害となるものとされた。読みも呉音によるアイチャクが本来である(チャク(着)が連濁によって濁るとするのは誤り)。一七世紀前半の「四河入海」には、マイナスの意味を伴いながらも仏教色のうかがわれない用法や、マイナスの意味を伴わない用法が現われて来る。江戸時代では西鶴の「浮世草子・新可笑記」に仏教色の無い用法が見えるが、マイナスのニュアンスを含む男女間の愛情に関わっている。漢音読みアイチャクは、明治に入ってから多くなる。

(『日本国語大辞典』 二〇〇)

二)

10. 総まとめ

現代中国語においても現代日本語においても「執着」が一般的な表記であるが、本来「執著」が正しい。「執著」は仏教の中国伝来に伴って新しく造語された仏教用語であり、「物事に執着する心、執念」というマイナスな意味合いを表す。仏教の言う「執著」には仏の教えに拘泥する「法執」と個体的な自我を実体視して拘泥する「我執」があり、何れも悟りの妨げとなるため、「執著」の観念を取り除き、ようやく悟りの境地に至るのである。

一方、「着」は「著」の俗字であり、月日が流れ「著」の「付着、取りつく」の意味が次第に「着」に吸収されたため、古代中国語において俗字表記の「執着」が誕生した。しかし、古代中国語において「執着」があくまでもごくわずかな存在であり、使用頻度は「執著」と比べものにならない。そして、意味の面では依然として仏教の影響を受けていて、マイナスな意味合いで使われていた。中国語における「執著」と「執着」の転機は二〇世紀初期に起きた新文化運動に求められる。

表記の面では俗語、俗字の使用が正当化されたため、俗字表記の「執着」は一九二〇年代以降本来の「執著」から逆転した。なお、意味の面では新文化運動が民主主義と科学を標榜し、旧来価値観の打破を目指したため、仏教の「執著」の観念を取り除き、悟りの境地に至るといふ教えが虚無主義として批判され、「執着」は「粘り強く努力する」とポジティブに解釈され始めた。その影響が現代中国語にも繋がっている。

一方、日本語のほうでは俗字表記の「執着」は中国語より遥に定着していたが、これは中国語の影響とは考えられず、日本人の漢字知識による意図的な書き換えと見るべきである。しかし、古典日本語における「執着」も古代中国語と同様に仏教の影響を払拭できなかった。明治期に入ると、新しい価値観の構築に伴って「執着」を「徹底的に追及する精神」と解釈する用例がたくさんでしてきたが、近代中国語の「粘り強く努力する」という一辺倒ではなかった。また、「執着」の読み方（ふりがな）も「しゅうぢやく」から「しゅうじゃく」へ替わり、最終的に「しゅうちやく」に辿り着いたのである。この読み方の変化は日本漢字音の影響によるものである。

現代日本語において「執着」は大抵「名声に執着する」「金銭に執着する」のようにマイナスな意味合いで使われているが、ポジティブに解釈される用例もないわけではない。これは明治期の余韻と理解してよい。但し、スポーツの世界では本来マイナスな意味合いを持つ「執着心」が良い意味で多用されていて、その理由は日本のスポーツ界に根付いている根性論との関係が大である。

【注】

- (1) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 第2881頁.
- (2) 本論文ではデータベース「人民日報図文データベース(1946~2020)」を利用する。直近一年間で言うと、「執着」は三百五十六件であるのに対して、「執著」は僅か三十一件しかない。
- (3) フルタイトルは「長春節後正風寒 直把隆冬作春天 白髮重溫少年夢 晴空凜凜放飛鷹」

となる。

- (4) (1) 金文明. “執著”還是“執着”？ [J]. 咬文嚼字. 1995年第1期. (2) 張樹錚. “執著”還是“執着”？ [J]. 語文建設. 1995年第7期. (3) 唐雪凝. “執着”和“執著” [J]. 語文建設. 2000年第12期. (4) 黃啓慶, 尹海良. 語文工具書的一致性與異形詞規範——以異形詞“執着”和“執著”為例 [J]. 語言文字応用. 2011年第3期. など.
- (5) 晁繼周. 說“執着” [J]. 辭書研究, 2013年第2期: 第53頁.
- (6) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 第2881頁.
なお、『漢語大詞典』(一九八六)の記述を引用する時に、中国の簡体字を日本の漢字に書き直す。「饒」「們」などのように現代日本語で使わない漢字を異体字で示す。以下同様。
- (7) 本論文ではJapanKnowledgeに収録された『日本国語大辞典第二版』(小学館 二〇〇二)を利用する。
- (8) 中国佛教文化研究所. 俗語佛源 [M]. 天津: 天津人民出版社, 2008: 第78-79頁.
- (9) 梁曉虹. 仏教詞語的構造与漢語語彙的發展 [M]. 北京: 北京語言学院出版社, 1994: 第48-49頁.
- (10) 金文明. “執著”還是“執着”？ [J]. 咬文嚼字. 1995年第1期: 第43頁.
- (11) 晁繼周. 說“執着” [J]. 辭書研究, 2013年第2期: 第53頁.
- (12) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 第12946頁.
- (13) 谷衍奎. 漢字源流字典 [M]. 北京: 語文出版社, 2008: 第1307頁.
- (14) 魏勵. 常用漢字源流字典 [M]. 上海: 上海辭書出版社, 2010: 第574頁.
- (15) 日本語訳は筆者によるもの。紙幅の都合で傍線の部分だけを翻訳する。
- (16) 但し「愛著」「著眼」「著意」など一部の漢語に関して、日本語において「愛着/著」「著/着眼」「著/著意」が併存していた時期がある。